

逆境を生きぬく力

[聖書]創世記 41 章 14～16 節

そこで、ファラオはヨセフを呼びにやった。ヨセフは直ちに牢屋から連れ出され、散髪をし着物を着替えてから、ファラオの前に出た。ファラオはヨセフに言った。「わたしは夢を見たのだが、それを解き明かす者がいない。聞くところによれば、お前は夢の話を聞いて、解き明かすことができるそうだが。」ヨセフはファラオに答えた。「わたしではありません。神がファラオの幸いについて告げられるのです。」
創世記 41 章 25～40 節

ヨセフはファラオに言った。「ファラオの夢は、どちらも同じ意味でございます。神がこれからなさろうとしていることを、ファラオにお告げになったのです。七頭のよく育った雌牛は七年のことです。七つのよく実った穂も七年のことです。どちらの夢も同じ意味でございます。その後から上がって来た七頭のやせた、醜い雌牛も七年のことです。また、やせて、東風で干からびた七つの穂も同じで、これらは七年の飢饉のことです。これは、先程ファラオに申し上げましたように、神がこれからなさろうとしていることを、ファラオにお示しになったのです。今から七年間、エジプトの国全体に大豊作が訪れます。しかし、その後七年間、飢饉が続き、エジプトの国に豊作があったことなど、すっかり忘れられてしまうでしょう。飢饉が国を滅ぼしてしまうのです。この国に豊作があったことは、その後続く飢饉のために全く忘れられてしまうでしょう。飢饉はそれほどひどいのです。ファラオが夢を二度も重ねて見られたのは、神がこのことを既に決定しておられ、神が間もなく実行されようとしておられるからです。このような次第ですから、ファラオは今すぐ、聡明で知恵のある人物をお見つけになって、エジプトの国を治めさせ、また、国中に監督官をお立てになり、豊作の七年の間、エジプトの国の産物の五分の一を徴収なさいますように。このようにして、これから訪れる豊年の間に食糧をできるかぎり集めさせ、町々の食糧となる穀物をファラオの管理の下に蓄え、保管させるのです。そうすれば、その食糧がエジプトの国を襲う七年の飢饉に対する国の備蓄となり、飢饉によって国が滅びることはないでしょう。」
ファラオと家来たちは皆、ヨセフの言葉に感心した。ファラオは家来たちに、「このように神の霊が宿っている人はほかにあるだろうか」と言い、ヨセフの方を向いてファラオは言った。「神がそういうことをみな示されたからには、お前ほど聡明で知恵のある者は、ほかにはいないであろう。お前をわが宮廷の責任者とする。わが国民は皆、お前の命に従うであろう。ただ王位にあるということだけで、わたしはお前の上に立つ。」

[序] 危険を予知したヨセフ

去る3月11日午後2時46分に発生した観測史上最大のM9大地震と15mを越える大津波によって、福島、宮城、岩手県を中心に東日本一帯が大きな被害を受けました。更に地震と津波で福島原子力発電所の全電源が止まり、原子炉の炉心溶融と圧力容器の損傷による放射能の放出で、今なお多くの住民及び農業、酪農に深刻な被害をもたらしています。このような大震災が発生する危険の予兆に気づき、それに対する対応策と取組んだ人が日本の国にはいなかったのでしょうか。

今から約3700年前のことです。世界はあの大ピラミッドを造り上げる国力を持つエジプトを中心に、周辺各地が7年に及ぶ深刻な大飢饉に見舞われました。その時には、一人の男ヨセフの素晴らしい働きによって、大飢饉の発生が予知され、適切な対応策が行われて、多くの人々が餓死から救われたのです。我が国にはヨセフが欠けていました。残念です。今日はそのヨセフについて学びます。

[1] ヨセフの果たした功績

このヨセフ物語は、古代文学の最高傑作の一つとされています。イスラエル三代目の族長ヤコ

ブの秘蔵息子ヨセフが、若くして奴隷にされてエジプトに売り飛ばされてしまいました。讒言にあって余儀なく10年余の牢獄生活を送りますが、救い出されて、エジプト国王に次ぐ No2の宰相に出世する30才までの数奇な生涯、そして宰相としての素晴らしい手腕とイスラエルの民をエジプトに救い出した業績は、実に壮大で面白い物語です。この物語から、私たちも意義のある人生を送ることの出来る信仰の糧を学び取りたいものです。

ヨセフはヤコブの11番目の息子でした。父親に特別に可愛がられ、10人の兄たちに妬まれました。彼は夢を見る男で、兄たちが自分にひれ伏す夢を二度も見ます。それを兄たちに平気で話すものですから、激しく憎まれて古井戸に投げ込まれ、奴隷商人によってエジプトに売り飛ばされてしまいました。

買い取られた先はエジプト国王の侍従長の家。彼は持ち前の才覚で主人の信頼を勝ち取り、支配人に取り立てられます。しかし女主人の誘惑に遭います。神さまと主人の信頼を裏切る罪は犯せませんと拒否する彼を憎んだ彼女は、彼が自分に挑んできたと言ったので、牢屋に投獄されてしまいました。

獄中でもヨセフは看守長の信頼を得て、囚人の世話の責任を任せられます。10年近い歳月が過ぎました。王の給仕長と料理長が投獄されました。彼らはそれぞれ夢を見ました。ヨセフがその夢を解くと、その通り料理長は死刑になり、給仕長は復職しました。ヨセフは復職する給仕長に、無実の罪に服している自分を助け出すよう頼みましたが、彼は忘れてしまいました。

2年後に国王が夢を見て思い煩いますが、誰もその夢を解く者がいません。その時になって給仕長はヨセフを思い出し、国王に伝えます。こうしてヨセフは 30 才になってやっと牢獄から引き出されて、国王の前に立ちました。国王の夢は7年間の大豊作とその後に7年間の大飢饉が続く警告です。ヨセフは飢饉で国が滅びないように対応策を早急にとるよう進言しました。一体誰が、やがて襲いかかる国難に適切に対処して、国を守ることが出来るのか。ヨセフが国王に次ぐ宰相に任命されることになりました。

彼は7年間の大豊作の間に国中の食料を出来る限り集めて、町々に備蓄しました。続いて7年間の大飢饉となりました。世界各地からエジプトの穀物を買って求めに人々が集まってきました。カナンに住むヨセフの兄たち10人も、父ヤコブの命でヨセフの許に穀物を買って来ました。ヨセフは我が身を明かさずに兄たちをテストして観察しました。自分の後に同じ母から生まれたベニヤミンが、自分と同様に父の偏愛を受けて兄たちに妬まれているに違いない。それならば自分の手許に引き取った方が良くと思ったからです。

しかし兄たちも心が変わっていました。弟を殺そうとして失い、父を嘆かせた罪を深く悔いていました。そして末の弟ベニヤミンに対する父の情愛を受け入れ、我が身に代えても守ろうとする兄になっていました。ヨセフはその姿を目の当たりにして声を上げて泣き、兄たちと和解することが出来ました。

そして老いた父と一族70人をエジプトに迎えて、ゴセンの地に移住させました。こうしてイスラエルの民はその地で増え広がり、強力な民族へと成長していきます。

[2] 監獄生活の屈辱

英国からはるばる来られたコーンウォール・リー宣教師は、草津温泉に集まったハンセン病患者から、「母様」と慕われた方です。50才で来日され、59才になって草津に移りました。約20年間自分の財産はみな献げて世から捨てられた病者に仕えました。

リー先生は宣教師として日本に来る前は、イギリスで女流文学者でした。43才の作品”Gold in the Furnace”(厳しい試練で磨かれた金)は、無実の罪で裁判にかけられ、牢獄に三ヶ月閉じ込められた若い女性の心の闘いと、やがて一切を試練として受け容れ、信仰を磨いていく姿を描いたものだそうです。

主人公は14才で父親と死別し、養父に育てられます。勤勉で誠実で健気な娘に成長しました。それなのに「自惚れて、思い上がっている」という陰口が耳に入り、ショックを受けました。その時に、「ヨセフが奴隷としてエジプトの売られた、無実の罪で長い獄中生活を余儀なくされた試練によって、自惚れを焼き尽くされて、人に仕える者に成長した」という説教を聞きました。

主人公は自分に対抗意識を持つ女性から、その人が犯した罪を一方的になすり付けられて裁判にかけられました。正義の叫びを上げたい衝動に駆られますが、自分を練り清める試練として受け止めることにしました。弁明をしないために有罪となり投獄されます。身体検査を受けて囚人服に着替えさせられた時に、激しい屈辱感がこみ上げてきました。陰鬱な獄中生活での数々のおぞましさ。

監獄付チャプレンが言いました。「間違ったことをしていないのに受ける苦しみは、私たちの捧げる神への贈り物です。他の人の罰を担うのであれば、それは神に対して最大の榮譽になるでしょう」。彼女は答えました。「でも自分から罰を引き受けようとしたのではありませんでした」。チャプレンは言います。「自分で選びとったことにすることは出来ますよ」。無実の罪で投獄された獄中生活での心の戦いは容易なものではありませんでしたが、不当な裁判と十字架刑を黙って引き受けられたイエス・キリストを見上げることによって、乗り越えていったのでした。

これが、リー先生の作品”Gold in the Furnace”の概略です。先生は、自惚れや思い上がりを捨てて、ハンセン病患者にひたすら仕える自分になりたいと、無実の罪で長い監獄生活を送ったヨセフを、いつも心に覚え続けておられたようでした。

[3] 「主が共におられる」とは

この作品の主人公の監獄生活は3ヶ月でしたが、その短い期間でさえも、心の葛藤は大変なものでした。一方ヨセフの監獄生活は、恐らく20才頃から30才まで10年余に及ぶものでした。何と長い監獄生活だったことでしょう。殊に28才の時に、監獄に入って来た王の給仕長の夢を解いて上げ

た時には、救い出されるチャンス到来かと期待を抱いたに違いありません。しかし無情にも忘れ去られてしまいました。

所詮エジプトという大国の監獄に、囚人として投げ込まれた奴隷のユダヤ人に過ぎません。誰にも顧みられず、忘れ去られてしまって当然でしょう。救い出される可能性などゼロに等しい。このような絶望的状况に置かれて、よくもまあくじけないで、耐えることが出来たものです。秘訣はどこにあったのでしょうか？

39章の初めに、侍従長ポティファルに奴隷として買い取られた時、「主がヨセフと共におられたので」彼のなすことがすべてうまくいって、主人の信頼を得るようになったと、二度繰り返して記述されています。また39章の終わりにも、女主人の讒言で監獄に入れられてからも、「主がヨセフと共におられ」、恵みを施し、万事がうまくいくので、看守長の信頼を得たと、二度繰り返して記述されています。

ヨセフは女主人の強い誘惑に対して、主人の信頼を裏切る大きな悪を働いて、神に罪を犯すことができませんと、きっぱり拒否しています。神さまはこのようなヨセフを何故お守りにならなかったのでしょうか。族長ヤコブの秘蔵息子からエジプトの奴隷に転落し、更に監獄へと転落していく人生が、どうして「主が共におられる」と言えるのでしょうか？ しかも無実の罪なのに10年余も監獄生活を余儀なくさせるなど、これでどうして「主が共におられる」と言えるのでしょうか？

私たちは6月から、アブラハム、イサク、ヤコブを学んで、ヨセフまで来ました。神さまは地上の氏族すべてを祝福する源として、先ずアブラハムをお召しになりました。そしてその子のイサクを、そしてヤコブをお召しになりました。彼らの生涯には、すべての人に救いが及ぶようにと働かれる神さまが、自分と共にいてくださり、お用いになっているのだという信仰が一貫していました。ですからヨセフもその信仰を受け継いでいたのです。

ヨセフは国王の夢を解くにあたって「神がこれからなさろうとしていることを、ファラオにお告げになったのです」(41:25)、「ファラオが夢を二度も重ねて見られたのは、神が間もなく実行されようとしておられるからです」(41:32)と語っています。ヨセフは神さまがこの世界でどうお働きになるかに注目しています。そして御心にそって多くの人の祝福になるように、王も自分も働かねばと考えています。

大飢饉が続けば、国民が大勢飢え死にするのです。エジプトのみか、世界の多くの人々が飢死にするのです。自分ひとりの人生が、自分の願い通りにうまく行くかどうかではなくて、多くの民の祝福のために、神さまはどのようになさろうとされるのか？ そしてこの私に何をしろとお考えなのだろうか？ ヨセフはエジプト国王の前に立ちながら、こう考えたのではないのでしょうか。

主が私と共にいてくださるとは、自分の願いを一つ一つ皆、神さまがかなえてくださるということではありません。全ての人を祝福しようとする神さまが、私と共にいて、私をお用いくださるという信

仰です。神さまは夢を通して神の心を読み取る賜物をヨセフにお与えになりました。そして飢饉の迫る時に、彼をエジプト王の近くに置くために、奴隷にし、さらに侍従長の牢獄に留めて置かれたのです。ヨセフは王の前に引き出されて、夢を聞かされた時に、主が自分と共におられて、今日この時に備えて来られたのだと悟ったのではないのでしょうか。

[結] 神さまに目を注いで生きる

それにしても、逆境の中でヨセフはよくも絶望しなかったものです。それどころか、30才にしていきなり大国の宰相となっても、立派にその任務を果たせるまでに、よくも自分を磨き上げて来たものです。我が子を有名な大学に入れて良い就職をさせようと必死になる世の親たちは、もっとヨセフを学ばなければなりません。

私たちの人格形成に、何が一番大切か？「神がそういうことをみな示されたからには、お前ほど聡明で知恵のある者は、ほかにはいないであろう」。この国王の言葉がいみじくも謂い得て妙です。「神が示された」そうです。ヨセフは多くの人によって傷つけられ、不当な扱いを受けました。しかし歴史に働き、また自分の内に働いて下さる神さまに、いつも目を注いで生き抜きました。

それが彼を聡明で爽やかな人格の持ち主に育て上げたのです。ヤコブはどん底に沈む彼の傍らに立ち、語りかけて下さる神さまを知りました。ヨセフはその信仰を父からしっかりと受継いでいたのです。

私たちも、どんなときにでも神さまが共にいてくださる信仰を持ち、神さまの霊を豊かに頂いて自分の霊性を養い、歴史を導く神さまの御心を悟り、他の人に神さまの祝福が及んでいく働きに、用いられる者になっていきたいものです。

完